CONTENTS

1頁 ・高齢者見守り懇談会 開催
2頁 ・ケアワーカー・トレーナーズ・ワークショップ研修
・奈良県発行福祉情報誌「care Jr.」
3頁 ・第6回慢性期リハビリテーション学会 in 川越
・ふれあいの里健康講座開催
4頁 ・「しゃん・ふう」による二胡サロンコンサート
・ふれあいの里研究発表会

第122号　ふれあいの里
〒632-0001 天理市中之庄町470　TEL.0743-65-1771(代)
発行責任者：鉄村　信治
編　　集：ふれあいの里広報委員会
http://www.fureai-net.com/

高齢者見守り懇談会 開催

～厚生労働省老健局局長による見守り事業視察～

平成31年1月21日、厚生労働省老健局局長の大島一博氏が社会福祉法人大和清寿会で取り組んでいる見守り活動の視察に来られ、高齢者見守り懇談会に参加されました。

当日は天理市櫟本町の瓦釜地域で活動されているサロン瓦釜を視察していただき、その後、見守り活動対象者宅2軒へ出向き、設置しているセコム緊急通報システムや迷惑電話チェッカーなどの機器の確認をしていただき、実際の見守り活動の主旨を説明させていただきました。

また見守り対象の方々と普段の生活の様子や見守り活動についての思いなどを懇談していただくことで、見守り活動の実践を確認していただきました。

見守り活動の視察後は、社会福祉法人大和清寿会で運行している地域高齢者見守り・巡回バス『すまいる号』にもご乗車いただき、運行状況等の説明をしながら高齢者見守り懇談会の会場となったならふくじゅ荘へ向かいました。

この懇談会は高齢者の見守り活動等の在り方などについての意見交換を目的に開催し、大島氏をはじめ、奈良県や天理市、警察、天理市内地域包括支援センター受託法人、櫟本校区区長会、櫟本校区民生委員児童委員協議会、セコム株式会社等の見守り活動協力機関や団体の方々にご参席いただきました。

まず初めに大島氏から、少子高齢化の現状と将来推計から考える2040年の医療や介護の在り方などについて講話いただきました。その内容では、2040年の社会保障費用の推計や就業者推計から2040年の日本の就業者推計は5600万人で、今と比べ1000万人減少し、その中で医療や福祉分野の就業者は現状800万人から200万人増え、1000万人は必要になってくることの説明がありました。現状でも人材不足の中で全体の約19%の人が医療や福祉分野で就業することが必要となるが、それが可能なのかどうか?ということが課題であるというお話をいただきました。さらに人口減少に合わせて介護専門職は、より重い介護が必要な方への支援を集中的にできるように介護の仕組みの見直し、元気な方々や軽度者の方々の支え合いや住民同士の見守り合い、介護予防活動への積極的な取り組みの重要性について説明いただきました。しかしこれらを住民の自然発生的な互助をきっかけに広めていくことは地域差やその取り組みが難しい部分もあり、その解決策として社会福祉法人の地域貢献活動としての様々な取り組みや、地域住民や自治体、各関係機関等がお互いにつながる形で実践している活動こそが来るべき超高齢社会を乗り切るための答えではないかという思いも伝えていただきました。

続いて各出席者が高齢者見守り活動等それぞれの取り組みを紹介し、活発に意見交換していただき、非常に有意義な懇談会となりました。

社会福祉法人大和清寿会としましてもこの視察や懇談会でいただいた多くのご意見を参考に、地域の皆様が住み慣れた地域で安全・安心に暮らせるようにこれからも高齢者見守り活動の歩みを進めたいと考えています。

(天理市北部地域包括支援センター　センター長　小西 大志)

健和会理念

私達は、医療がサービス業であることを認識し、以下の目標を掲げる。

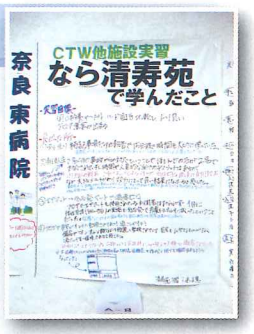
1・患者さん中心の医療・看護・介護
2・地域社会への貢献
3・研究心と向上心を持つ
4・和を尊ぶ

健和会基本方針

1・私たちふれあいの里の職員はいつも患者さんの意思を尊重し権利を遵守して、患者さん中心の医療、看護、介護を実践します。患者さんのADL(日常生活動作)改善とQOL(生活の質)向上のため、積極的にリハビリテーションに取り組みます。
2・私たちは、他の医療機関や地域の人々と連携して地域社会に貢献し、社会に開かれた施設を目指します。
3・私たちは患者さんから学ぶという初心を忘れず、より良い医療、看護、介護を提供できるように常に研鑽し探究する精神を持ち続けます。
4・私たちは力を合わせてチーム医療の遂行のために努力します。

ケアワーカー・トレーナーズ・ワークショップ(CTW)研修

～主任・リーダー・プリセプターが頑張っています～



ふれあいの里では、介護職員のための段階別研修(キャリアパス研修)を平成22年から継続して行っていますが、その研修とは別に平成25年から介護職員を指導する職位にある者の研修として介護職員指導者研修会(CTW研修)も行っています。

CTW研修は、各施設の主任・リーダー・プリセプターが参加し、意見交換を通して互いに学び合うワークショップ型の研修です。早いものでもう6年目になりますが、ふれあいの里の中では意外と知られていません。

そこで今回は、研修の様子を少しご紹介したいと思います。昨年12月にならふくじゅ荘研修室にて、平成30年度最後の研修としてポスターセッションを実施しました。7月から10月までの間、各自が体験してみたい部署へ学びたい内容を持って1日体験に行ってもらい、体験した部署の良かったところなどを模造紙1枚にまとめてもらいました。ポスターセッション会場の壁一面に貼られたポスターには参加者一人ひとりの個性があふれ、伝えたいことがぎっしり詰まっていました。

例えばケアハウスの職員がデイサービスの素晴らしいレクリエーションに驚かされ、自部署に取り入れたという発表では、大きな共感がありました。

また入所者が重症化しているグループホームの職員が特別養護老人ホームを見学し、何か介護のヒントを得られないかと取り組んだ例は、グループホームのハード面や職員の苦労・工夫を知る機会となりました。

他部署を知ることで自部署でできていないことに気付くことができ、今後に活かしていく良い機会となり、参加者からは『視野が広がる』『情報共有ができる』と前向きな声が多く聞かれました。

CTW研修が始まった当初は、CTW委員も試行錯誤の繰り返しでした。学んでほしいことはたくさんありましたが、当時年間課題であったケーススタディなどにはほとんど取り組むことができていませんでした。研修を通じて自部署の問題点を見つけ、原因を探り、目標を立て、改善に向けて具体的に取り組んでいくことから多くのことを学べることや提出物の期日管理の大切さなどを繰り返し伝えていきました。

最初は不安そうな顔をしていた参加者も今では同じ職位の者

同士、分かり合えることも多いのか研修で顔を合わせることを楽しみにしているようにも見えます。もちろん研修中は活発に意見交換し、時間が足りなくなることもあるほど充実しています。

主任・リーダー・プリセプターが成長することはふれあいの里の介護の質を守ることにつながると信じ、参加者が興味とやりがいと自発性を持って参加できる研修を目指し、CTW委員は平成31年度も邁進してまいります。

(エバーライフ西大寺　館長　杉本 由)

奈良県発行福祉情報誌「care Jr.」

将来の進路の一つに！ 介護・福祉の職場紹介！

奈良県では高齢者の増加を背景に、将来に向けた介護・福祉の人材確保のため、様々な取り組みをされています。その取り組みの一つとして、将来の進路を考え始める中学生を対象にした福祉と介護の情報誌「care Jr.（ケアジュニア）」を発行されました。

同誌は県内の中学校や高等学校等に配布され、中学1年生の時から進路の一つとして介護・福祉の仕事というものがあることを知ってもらい、将来、介護・福祉の現場での活躍を目指すきっかけになることを目的として発行されたものです。

同世代の学生の体験の様子や介護職員の仕事内容を紹介し、また4コマ漫画等を使用してわかりやすく紹介しています。

奈良東病院グループでも将来の介護人材確保の取り組みの一環として、県内にある高校のインターンシップ受け入れや外部講師として出向くなど、介護の仕事を広く知ってもらうための取り組みを積極的に行っており、その取り組み内容も同誌に掲載されています。

今後も当グループは県や地域の活動に積極的に協力させていただき、介護・福祉の職場を身近に感じ、興味をもっていただく活動に取り組んでいきます。

■ 中学生のための福祉と介護の情報誌「care Jr.（ケアジュニア）」
福祉・介護の仕事魅力情報ならに掲載
http://www3.pref.nara.jp/fukushikaigo/

(ふれあいの里　広報委員会)

第6回慢性期リハビリテーション学会 in 川越

～生花を目で見て触れて感じるフラワーアレンジメント～

平成31年2月15日～16日に埼玉県川越市で開催された慢性期リハビリテーション学会において、演題発表の機会をいただきました。内容は昨年委員会企画として開催したフラワーアレンジメントです。花屋スタッフの方と協同し、院内で出張イベントを計3回実施し、生花に触れ、楽しめる機会を提供した取り組みをまとめたものです。以前から生花を用いたイベントをできないか模索しており、花屋スタッフの方と知り合う縁もあり、今回の取り組みに至りました。花屋スタッフの方もすでにサロン活動など地域でイベントを開催されていました。今回、医療･福祉分野でも行いたいと興味を示し、作業療法士主導の下、委員会スタッフ、各部署と話し合いをしながら企画を考えました。

フラワーアレンジメントと聞くと、作るのが難しいのでは?と感じる方もいらっしゃるかと思います。作品の難易度は様々ですが、作業工程を分析すると切り花をオアシス（吸水性のスポンジ）に挿すという作業の連続であり、課題達成の自由度は高く、どんな形になっても作品として成立しやすい特性があります。参加した患者様の中に自身で行うことが困難な方もいらっしゃいましたが、その方にはリハビリ･病棟スタッフが付き添い、挿す場所をスタッフとやり取りしながら指定し、また話すことが難しい方はその場を共有するなど参加様式は問わず行いました。また、花屋スタッフの方から用意された生花の紹介やフラワーアレンジメントの要点を説明していただき、専門的知識の共有ができ、失敗体験が回避され、見知らぬ人との関わりや場の雰囲気から、より非日常を味わうことができたと思います。

参加者の中には生花にあまり興味がない方もいらっしゃいましたが、生花を目で見て触れて体感することで表情が豊かになり、普段より能動的に活動に参加し、有意義な時間を患者様･スタッフとともに過ごすことができました。完成した作品は病院本館1階のロビーや3階渡り廊下などに匿名で飾りました。参加した患者様も自分の作品を見に離床され、家族様に作品を紹介される場面もあり、作品への愛着を感じました。他の面会の方からも「きれいですね」「何かイベントをされたのですか」など声をかけていただき、イベントに参加していない方にとっても目で見て触れる良い機会になったと思います。

演題発表前後では複数の学会参加者から質問や興味を示していただきましたが、同じように生花を用いたイベントを開催するにしても準備期間やスタッフの確保が難しい状況も多いと伺いました。今回のイベント開催の経緯を改めて説明させていただくと、質問者も所属機関で取り組んでみたいと賛同してくださる方も多数いらっしゃいました。実際に花屋スタッフの方を招くという点では理解していただくことと準備期間が必要であり、また開催する場所や関係スタッフの確保など、私自身大変さを感じることはありました。しかし皆様とともにフラワーアレンジメントという作業を通じ、患者様の笑顔や楽しそうな表情に立ち会うことができ、開催してよかったと素直に感じました。学会での発表を通じて、当院以外の医療･福祉機関においても生花に触れる機会が広まることを期待しています。また当院でも内容を深めた継続開催を企画し、活動の場を拡大してきたいと思います。

（アクティビティ委員会　副委員長
リハビリテーション科　作業療法士　西浦 正典）

ふれあいの里健康講座開催　～テーマは『健康』～

ふれあいの里健康講座企画委員会では、平成30年度は『健康』をテーマに講座の準備を進めてまいりました。

昨年11月のケアハウス清寿苑から始まり、ケアハウスふる里･エバーライフ・やまとで計4回講座を開催し、約100名の方にご参加いただきました。

講座内容はまず、当院リハビリテーション科の臨床心理士がスライドを用いて「認知症」についてその種類や症状等の講義をし、その後、血圧･握力･骨密度の測定を行い、その結果を健康カードに記入し参加者の方々に配布いたしました。

またドリンクとお菓子、当院の取引先業者様よりご提供いただいたラクーナパウダーを用意し測定の間の待ち時間もくつろいでいただけるように工夫し、できる限りスムーズに進行できるように心掛けました。

今回の講座は、参加者の方々はもちろんのこと、私たち委員にとっても認知症という病気について知る良い機会となりました。今後も皆様のためになる、また喜んでいただける企画を考えてまいります。この度ご参加いただきました皆様、また開催の準備をしていただいた職員の皆様、ありがとうございました。

（ふれあいの里　健康講座企画委員会　土橋 勝人）

「しゃん・ふう」による二胡サロンコンサート ～中国弦楽器の音色に触れて～

皆様は「二胡(にこ)」という楽器をご存知でしょうか。日本では三味線という弦楽器がありますが、二胡は中国の弦楽器で東洋のバイオリンと言われています。先日エバーライフでデュオグループ「しゃん・ふう」による二胡のサロンコンサートが行われました。

「しゃん・ふう」とは川野真広様とその奥様による二胡演奏のデュオグループです。奏者の川野様は天理市にある浄土宗善福寺の副住職で、グループ名は善福寺の「善」と「福」を中国語読みにしたものだそうです。

コンサートの初めに館長から川野様の紹介があり、その後、演奏が始まりました。今回は川野真広様お一人での演奏で、最初の曲は「蘇州夜曲」です。二胡のきれいでやさしい音色がメロディーを奏で、皆様静かに耳を傾けられていました。次曲、「夜来香(イエライシャン)」の演奏が終わると自然と拍手がわき起こりました。また曲の合間には女子十二楽坊で二胡が演奏されていたことや二胡がどのように作られているかなど、いろいろなトークを挟みながら温かい雰囲気で進行されました。続いて「荒城の月」を演奏され、二胡の伸びのある澄んだ音色で、情景を見事に表現されていました。

さらに二胡の演奏に合わせて《みんなで歌いましょう》のコーナーで「春よ来い」や「花」など川野様のリードで声を合わせて唱いました。「早春賦」では、鳥の鳴き声まで二胡で表現されて皆様驚嘆されていました。

生の演奏に触れる機会が少ない二胡の演奏に、入居者様はとても素敵な時間を過ごされていました。

（エバーライフ　森本 晃司）

ふれあいの里 研究発表会

平成31年2月16日、ふれあいの里研究発表会が開催され、今年は11題の発表がありました。今年で第19回目を迎えますが、年々研究内容や発表方法がよりよくなってきていると感じると同時に審査委員からも同様の意見を耳にします。

この発表会を迎えるに当たり、各発表チームは準備のために長い時間を費やします。

まずは研究テーマを考えるところから始まります。このテーマですが日々問題意識を持って業務を行うことで研究テーマが絞られてきます。多くの場合それは利用者様へのサービスを考えている時だと、発表者から聞きなるほどと思いました。これは健和会の理念である「患者さん中心の医療・看護・介護」「研究心と向上心をもつ」に結びつくことだと思います。次にテーマが決まればそれに関する資料をできるだけたくさん集めどのようなデーターが必要か検討しデーター収集に臨みます。長期間にわたる膨大なデーター取りは、通常業務がある中、時間を割いての取り組みなので、部署全体の協力無くしてはできません。毎日の観察等が必要な研究に関しては、研究チーム以外のスタッフの協力を得て、観察方法や記録方法を共有することが必要になります。そのような積み重ねで得たデーターを基に考察を繰り返し、結果に至ります。

いよいよ発表会当日、来聴者は当初準備した椅子では足らず、数回足し並べなければならないほどで、業務中にもかかわらず総勢84名もの出席がありました。それぞれの発表に興味を持ち、それを自分の部署に持ち帰り活用できるのではないかと熱心に耳を傾け、質問もたくさんありました。

研究発表は発表会が終わりではなく、これがスタートだとも言われます。継続して研究を続け症例数を増やしたり、一度出た結果を違う角度から見直したりという再考察を行いながら、「研究し続けること」が大事なのだと聞いた事があります。

各チームは自ら研究したことを現場に返すことで、患者様、利用者様にとってより良いサービスを提供することができます。また来聴者も研究発表会がなければ知らないままでいたことを、現場にどんどん取り込むことで『より良いサービス』が広がっていきます。

発表チームにとって、その準備期間から発表に至るまでの道のりは決して容易なことではありません。しかし、そこから得られるものはとても大きなものだと考えます。患者様、利用者様のために、今後もこの研究発表会が職員にとって良い刺激となるよう、開催を続けていけたらと考えています。

発表チーム、来聴者、そして研究発表会開催にあたりご協力いただきました皆様、本当にありがとうございました。

（ふれあいの里　教育委員会　柿本 祥子）

編集後記

やわらかな春の日差しがふりそそぐ季節となりました。寒い冬を乗り越え、草花があちらこちらで芽を出し始めています。桜のつぼみも膨らみ始め、開花の準備を進めています。春の醍醐味、満開の桜が待ち遠しい今日この頃です。

さて、4月といえば新しい季節の始まりと同時に新年度の始まりです。今年に限っては新しい年号が発表され、5月1日に改元となります。2019年度はどのような年度となるのでしょうか。

私事ですが、今年息子が小学校入学を迎えます。親心としましては期待と不安が入り交じっておりますが、正直な気持ちとしましては不安の方が大きいというのが本音です。しかし、息子を信じ、成長を見守っていこうと思います。

これからさらに暖かい日が多くなってくるとは思いますが、まだまだ朝夕の寒暖の差が大きい日も続きます。体調には十分気をつけながら、春を満喫していただければと思います。

（広報委員長　橋本 重之）